

2019年度
地球環境『自然学』講座
第4回

テーマ
能登半島の里山里海づくり

講 師
石川県立自然史資料館
館 長

中村 浩二 先生

2019年5月25日
認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール
中村 浩二（なかむら こうじ）



1. 経歴

職歴：1947 年兵庫県神戸市生まれ。1970 年京都大学農学部卒業。1972 年京都大学大学院農学研究科修士課程修了、1977 年京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学、同年金沢大学理学部助手（生物学科生態学講座）に採用、1995 年同・理学部教授、2002 年同・自然計測応用研究センター（現・環日本海域環境研究センター）教授（生物多様性部門）およびセンター長（2008～2012）、金沢大学学長補佐（社会貢献担当、2009～2015）。2013 年金沢大学を定年退職、特任教授に着任（2013. 4～2016. 3）。

学位：農学博士（京都大学）。

専門：生態学（里山、熱帯、生物多様性など）。

里山里海の国際活動：国連大学などによる「日本の里山・里海評価（Japan Satoyama Satoumi Assessment, JSSA）」科学評価パネル共同議長。国連食糧農業機関（FAO）による世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems, GIAHS）の科学委員会メンバーを経て、東アジア農業遺産学会（East Asia Research Association for Agricultural Heritage Systems, ERAHS）の日本代表議長（2014～）。

人材育成活動：金沢大学「角間の里山自然学校」を設立（1999）、金沢大学「里山里海プロジェクト」代表（2006～）、「能登里海マイスター養成プログラム」（2007～2011）、「能登里山里海マイスター育成プログラム」（2012～2016）の代表（現・アドバイザー）。能登キャンパス構想推進協議会幹事長（2011～2016）として、能登半島と石川県の里山里海の保全、総合活用、地域再生に取り組む。フィリピン・イフガオ里山マイスター養成プログラムにプログラムマネージャーとして従事（JICA 草の根技術協力事業・地域活性化特別枠、2014～）。

2. 現職

金沢大学客員教授（名誉教授）、石川県立自然史資料館館長（2017. 4～）。国連大学（サステイナビリティ高等研究所）客員教授、中国科学院（地理自然資源研究所）客員教授。国立フィリピン大学オープン・ユニバーシティ客員教授。

3. 主要著書

1. 中村浩二（2010）、「日本の里山の現状と国際的意義」。334-335. 立本成文，日高敏隆（監修）、総合地球環境学研究所（編集）『地球環境学事典』所収、651 pp. 弘文堂、東京。
2. 中村浩二・嘉田良平（編著）『里山復権～能登からの発信』（2010）、創森社、223 pp.

3. Anantha Kumar Duraiappah, Koji Nakamura, Kazuhiko Takeuchi, Masataka Watanabe and Maiko Nishi (eds) (2012) *Satoyama-satoumi ecosystems and human well-being: Socio-ecological production landscapes of Japan*. United Nations University Press, 449 pp.
4. 国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会（アナンサ・クマール・ドゥライアパ、中村浩二、武内和彦、渡辺正孝、西 麻衣子）〔編集〕（2012），『里山・里海-自然の恵みと人々の暮らし』．朝倉書店、216 pp.
5. Exchange and Twinning Activities between GIAHS “Noto’ s Satoyama and Satoumi” and “Ifugao Rice Terraces of the Philippines” , (2018), 121-125. In: Yiu, E. and Nagata, A. eds. In: Yiu, E. and Nagata, A. eds. *The Road to Globally Important Agricultural Heritage Systems (GIAHS): United Nations University’ s Journey with Local Communities*, UNU-IAS OUIK, Kanazawa, Japan. 128 pp. 【イヴォーン・ユー、永田 明（編）世界農業遺産「能登の里山里海」と「フィリピン・イフガオ棚田」の交流と連携活動（Twinning）、2018, 121-123, 『世界農業遺産への道のり～国連大学と地域の歩み～』、UNU -IAS OUIK. 金沢. 128 pp. 】
6. 中村浩二、北村健二（2018）「第10章 人材が育つ仕組みー里山マイスターがもたらすもの」, 189-203. 『地域環境学：トランスディシプリナリー・サイエンスへの挑戦』、佐藤 哲・菊地 直樹（編）、2018/1/13、東京大学出版会、430 pp.
7. Chapter 10- Creating Platforms for Capacity Building in Rural Communities: Noto Peninsula, Japan and Ifugao, the Philippines. 189-207. In “Transformations of Social-Ecological Systems: Studies in co-creating integrated knowledge toward sustainable futures” , Edited by Tetsu Sato, Ilan Chabay, Jennifer Helgeson, Springer (2018), 430 pp.

その他：『スマトラの自然と人々』八坂書房（1992，共著），『週刊朝日百科 動物たちの地球 110号熱帯雨林 II』朝日新聞社（1993，共著），『週刊朝日百科 動物たちの地球 118号 離島・熱帯高山』朝日新聞社（1993，共著），『ハムシ類の生物学研究』Kluwer Academic Publications（1993，共著．英文），『インドネシアの昆虫の多様性：個体群動態と進化生物学の視点から』日本熱帯生態学会（2001，共編著．英文），『環日本海域の環境-過去・現在・将来-』丸善（2006．共著．英文），『人間活動の影響下にある生態系の応用景観生態学ー人間生態系と自然生態系の結合』シュプリンガー出版（2007，共著．英文）、『日本の里山・里海評価（概要版）』国連大学出版会（2010、共編著、英文、日本語）、『Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being: Assessing Trends to Rethink a Sustainable Future』Policy Brief, No. 7, 国連大学出版会（2010、共編著、英文）、『北信越の経験と教訓ー 過疎・高齢化を克服し、豊かな自然と伝統を活かす』（日本の里山・里海評価：クラスターの経験と教訓）。

2019.5.25 中村浩二

kojink@staff.kanazawa-u.ac.jp

レジュメ『能登の里山里海づくり～人材育成と国際連携』

(1) 自己紹介（配布したプロフィール参照）

(2) 日本の自然の特色

(3) 里山里海について

- ・ 里山里海の定義
- ・ なぜ、重要か
- ・ 里山里海が人にあたえる「生態系サービス」
- ・ 生物多様性の役割
- ・ 里山里海の現状と問題点
- ・ 能登半島は、なぜ過疎、高齢化になったのか？
- ・ 2種類の「里山問題」

(4) 里山の国際化；里山里海から SATOYAMA/SATOUMI、へ（国際化）

- ・ ミレニアム生態系評価（Millenium Ecosystem Assessment, MA）。国連が 2001～2005 年に地球レベルの環境評価として実施。
- ・ 「日本における里山里海評価」（Japan Satoyama Satoumi Assessment、JSSA）
- ・ MA の地域版（Sub-Global Assessment, SGA）として 2007～2010 に実施。日本全国レベルと国内 5 地域（クラスターとよぶ）ごとに分析し、それぞれ国レポートと 5 クラスターレポートとして出版した。
- ・ 能登が属する北信越クラスターでは、灌漑施設の整備により水資源管理がシステム化された反面、里山において文化的価値を含め重要な役割を果たしていた「ため池」の劣化・放棄が進んでいることなどが明らかとなった（日本の里山・里海評価（JSSA）の北信越クラスターレポート、2010）。
- ・ JSSA はグローバル視点での里山問題の指摘と処方箋を示しており、IPSI 設立に大きな役割を果たした。また、日本とフィリピンの里山問題を正しく把握することにより、能登の人材育成のノウハウのイフガオへの「移転」が可能となった（後述）。
- ・ 「SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ」（IPSI）
- ・ 国連が生物多様性条約締約国会議（CBD-COP）を隔年開催。2010 年に愛知県名古屋市中区で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）で採択。
- ・ 「世界農業遺産（GIAHS）」→「能登の里山里海」の認定（2011.6）
 - ・ 国連食糧農業機関（FAO）が推進し、英語では Globally Important Agricultural Heritage Systems, GIAHS（世界重要農業資産システム）と呼ばれる。背景には、

化学肥料、合成殺虫剤、エネルギーの大量使用による近代農業の行き過ぎた生産性への偏重が、世界各地で森林破壊や水質汚染等の環境問題を引き起こし、地域固有の文化や景観、生物多様性の消失を招いていることへの反省がある。世界農業遺産の目的は、近代化の中で失われつつあるその土地の環境を生かした伝統的な農業・農法、生物多様性が守られた土地利用、農村文化・農村景観などを「地域システム」として一体的に維持保全し、次世代へ継承していくことである。

- ・認定基準

1. 食料および生計の保証、2. 農業生物多様性、3. 地域の伝統的な知識システム、4. 文化、価値観および社会組織、5. ランドスケープ、シーンスケープの特徴

- ・日本国内の認定地

- 2011、佐渡（トキと共生する里づくり）・能登（里山里海）
- 2013、国東半島（ため池と里山）、阿蘇（草原の牧畜）、静岡（茶草場）
- 2015、長良川（里川とアユ）、宮崎（椎葉村の伝統林業・文化）、みなべ・田辺（梅システム）
- 2017、にし阿波（傾斜地農業）、静岡（わさび）、大崎（水田農業）

- ・日本農業遺産（2017～、15 地区）

- 認定基準

1. 食料および生計の保証、2. 農業生物多様性、3. 地域の伝統的な知識システム、4. 文化・価値観・社旗組織、5. ランドスケープ、シーンスケープの特徴、6. 変化に対する強靱製、7. 多様な主体の参画、8. 6 次産業の推進

（５）金沢大学による里山里海活動（教育・研究）と人材養成

- ・ボランティア活動から出発し、地域再生、人材養成活動へと展開
- ・金沢大学角間（かくま）キャンパス
 - ・「角間の里山自然学校」、1999～
 - ・富士フィルム・グリーンファンド「角間里山ゼミ」、2014～15
- ・能登半島（珠洲（すず）市など
 - ・金沢大学能登学舎の設立
 - ・「能登半島里山里海自然学校」、2006～08
 - ・NPO おらっちゃんの里山里海の設立、2007
 - ・「能登里山マイスター養成プログラム」、2007～11
- ・能登が必要とする次世代の人材像
 - ① 環境に配慮した農業に取り組む「篤農人材」（実際には農業だけでなく、林業、水産業も対象）
 - ② 一次産品に二 次（加工）、三次（サービス）の付加価値をもたらす「ビ

ジネス」人材

③ 篤農人材やビジネス人材をつなぎ、地域ぐるみで新事業を創造する

④ 「リーダー人材」

- ・人材育成システムの特徴
 - ・45才以下の若手社会人を対象とした2年間コース
 - ・開校日は金曜夜と土曜日
 - ・5年間に62人の修了生が巣立った（東京など都会からの移住者14人が能登に定住し、活躍。女性比率が高い）
 - ・若手特任教員による担任制、個人ごとの卒論が必修、公開プレゼンによる審査
 - ・「能登里山里海マイスター育成プログラム」、2012～15、2016～18、2019～
- ・マイスタープログラムと並行して複数プログラムを実施
 - 「のと半島里山里海アクティビティ」、2009～11。都市と能登の若者交流のための協働ディレクターが雇用され、能登の自治体との協議会をつくり活動を展開
 - 「能登いきものマイスター」、2010～13。里山里海マイスター育成プログラムの軽量版のような形で、生物多様性に焦点を当てて実施
- ・マイスター養成の成果と波及効果
 - ・183人が修了しマイスター認定を受ける（2007～18）
 - ・石川県内の自治体、全国、国際プラットフォームへの波及
 - ・地域づくり総務大臣賞（2013）、プラチナ大賞（2015）、能登SDGsラボ設立（2018）など

（6）イフガオ棚田（フィリピン・ルソン島北部）との国際連携（GIAHS Twinning）

- ・イフガオ棚田は、ユネスコ世界文化遺産（1995）、世界農業遺産に認定（2005/11）
- ・農業後継者不足と無計画な観光開発 → ユネスコ世界危機遺産に認定（2001～2012）
- ・国際協力機構（JICA）草の根技術協力（地域経済活性化特別枠）事業による「イフガオ里山マイスター養成プログラム、Ifugao Satoyama Meister Training Program、ISMTP」（略称）、2013～20の実施
 - ・能登の経験をイフガオへ「移植」→「GIAHS Twinning」（第4回世界GIAHSフォーラムのコミュニケ、2013、能登・七尾市）
 - 【フェーズ1、2014.2～17.2】
 - ・世界農業遺産(GIAHS)「イフガオの棚田」の持続的発展のための人材養成プログラムの構築支援事業
 - 【フェーズ2、2016.6.6～20.5】
 - ・世界農業遺産（GIAHS）「イフガオの棚田」と「能登の里山里海」の持続的

発展のための地域連携構築事業

(1) マイスター育成事業の強化・持続発展

(2) GIAHS Twinning (相互交流) による能登・佐渡・イフガオの持続発展

・ 5年間の成果と今後の課題

(1) 支援体制の確立、定期総会の開催

- ・ イフガオ GIAHS 持続発展協議会 (IGDC、イフガオ)、
イフガオ G I A H S 支援協議会 (IGSC、能登) が確立。

(2) 実施体制の確立

- ・ 国立イフガオ大学『GIAHS センター』内に、『イフガオ里山マイスター
成プログラム (ISMTP)』→事務局が確立。

(3) 授業・実習の実施 ・ 月 1 回 レクチャ、実習を実施

(4) 修了生数 ・ フェーズ 1 (2014-16) 51 名、フェーズ 2 (2017-18)
30 名 → 合計 81 名が修了。

(5) 受講生の修了論文課題

- ・ 農業 (棚田の伝統米)
- ・ 栽培、農産物加工
- ・ 生態系の問題 (外来種問題、地球温暖化の影響)
- ・ 伝統文化の継承
- ・ エコツーリズム

(6) イフガオ・能登・佐渡の交流

- ・ イフガオ→ 能登・金沢 (毎年約 20 名、1 週間)
- ・ 能登・金沢→イフガオ
- ・ 能登マイスター教員
 - ・ 石川県立大学、国連大学/OUIK、総合地球環境学研究所
 - ・ 泉谷満寿裕 イフガオ G I A H S 支援協議会長 (2016)
 - ・ 伊藤敏明 新潟県農業指導士
 - ・ 金沢大学学生国際インターンシップ (3 回)
 - ・ 自治体職員 (石川県庁、輪島市、珠洲市、能登町、宝達志水)、
能登マイスター修了生等

(7) 国際シンポジウム、フォーラム等の開催。イフガオ、能登・金沢
(年 各 1 回)

(8) フェーズ 3 をどのように立ちあげ、持続発展させるか？

(9) GIAHS Twinning による能登、佐渡、イフガオの地域活性化は
可能か？

(7) まとめ

- ・ 人材の養成 (学生、社会人、外国人)、ボランティア/生業・起業
- ・ 里山・里海は、再活性化するか (様々な困難性)
- ・ これからの里山・里海をどう保全、活用し、持続発社会を作るか
- ・ 能登、佐渡は、イフガオとの交流・連携をどう活かせるか